
D.C.? E.F. ~ダ・カーポ?エターナル・フォーエバー

橘天龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D・C・?・E・F・;ダ・カーポ?・エターナル・フォーエバー

【NZコード】

N4875M

【作者名】

橋天龍

【あらすじ】

混濁した意識の中、俺を呼び掛ける少女がいた。少女の名はアイシア。俺が愛した少女。アイシアは俺に告げる…

D・C・?、アイシアルートの一次創作作品です。一部ネタバレ、憑依系が嫌いな人はブラウザバックをお願いします

第1話【消失と融合】（前書き）

文章に変なところがあつまつたらすみませんm(ーー)m

第1話【消失と融合】

……俺の存在が消える……

……俺は本来いなはずの存在……だから仕方ない……のかも知れない……

混沌した意識のなか、必至に繋ぎ止める何かがある……

? 「義之くん！ 意識をしつかり保つて…」

『…………アイシア？』

消えかけた意識を集中させると、さくらむんと同じくらいの小柄な少女……アイシアが泣きながら訴えかけていた。

1ヶ月前に出会い、一目で魅了された不思議な雰囲気の少女。

他の人達の記憶に残らない少女……そんな儚げな雰囲気を一切感じさせない、明朗な性格の少女……

「義之くん！ 諦めちやだめ！」

『だが……俺は……もつ…』

アイシアのおかげで何とか意識は保つことができたが、俺は既に消えかけていた。

「…………義之くん、よく聞いて」

意を決した表情をしながらアイシアが告げる。

「今からわたしの魔法で義之とわたしの存在を融合せしむる」

『…え?』

にわかに信じがたい話だ。

俺とアイシアが融合??

『なん…で…そん…』

「義之くんは身体」と全部存在が消える。でもわたしは身体はあるけど存在ないようなものなの。だから、魔法でわたしと義之くんを融合したほうがいいの」

『でも…そん…な…』と…した…ひ…』

「あまり喋らないで。大丈夫、義之くん。義之くんは消えないよ。文字じおり融合…わたしの身体に義之くんの意識が宿るの。…わたしの身体じや嫌かもしれないけど」

あははとアイシアは苦笑にする

『そんなこと…ない…! それよりも…アイシアは…それでいい…のか?』

「いいよ。友達のいないわたしが残るより、たくさんの友達に囲まれた義之くんが残るほうがいいもの。…わたしの身体、好きなようใชつていいくからね?』

『だめだ… そんなことしたら… アイシアが… 』

「違うよ。わたしと義之くんは一つになるの。そう思つたほうがき
つといいよ」

『アイ… シア…』

涙を溜めた満面の笑みを最後に俺は意識を深く沈めていった…

続く

第2話【事実と虚構】（前書き）

芳乃さくら初登場。

第2話【事実と虚構】

『……ん……ん……』

俺はゆっくり目を覚ますとさくらさんが俺を見下ろしていた。

さくら「義之くん、気がついた?」

穂やかだが、やや悲しげな笑みを浮かべてさくらさんが話しかける。

『さくらさん……俺……』

なんだか妙な感じがする。声も変……とこりか聞き覚えがあるような。

さくら「さくらこりか」とは貴女は義之くんで間違いないんだね?』

悲しげなような……嬉しげなような……複雑な表情で尋ねてくる。

『俺は俺ですよ。何を言つて……』

俺はさらに違和感を覚える。俺から発する声は少女のよくなソプラノボイスだ

さくら「あのね……義之くん。今からボクが話すことによく聞いて」

さくらさんが真剣な表情になりながら俺の身体を起こす。

あれ? さくらさんの手が大きく……

さくら「今の義之くんは義之くんであつて、義之くんじゃないの」

『……言つてゐる意味がわかりませんが…』

俺は顔を傾ける。田線も何故かさくらさんと同じ顔だ。

さくら「順を追つて説明するね。義之くんはボクが枯れない桜に願つた理想の存在。……そしてその桜は枯れてしまった」

俺は無言で頷く

さくら「そして桜が枯れたことにより造られた存在の義之くんは消えかけた。そこまではわかるよね？」

俺は再び頷く

さくら「でも消えてない。何故だかわかる？」

『それは…』

先程から感じる妙な違和感。

嫌な予感がする

さくら「…………アイシアの魔法で義之くんの存在は固定化されたの。……でもね、魔法で固定化出来たのは義之くんの意識だけ。そして魔法の代償として……」

予感が確信になる

さくら「アイシアは自分の身体に義之くんの意識を移して…自信の意識は消失したの」

『そん……な……』

アイシアの声で愕然とする。

さくら「ボクにまじりもなかつた…2人一緒に助けられなかつたの…」

さくらさんが涙を流しながら俺の両肩に手を置くと視線を落とした

『わくわくさんとは懸くないですよ…』

布団にポツポツの涙の跡がつく

『わくわくさん、ボクが…』

『わくわくさん、ボクが…』
言いかけて口をつぐむ。

”ボクが義之くんの存在を願つてしまつたから。”

それを俺自身に言いたくないからだらう。

ポロポロ泣きながら視線を落とすさくらさんの頭に俺はまつと手を乗せた

白くて小さな手…俺はアイシアになつたんだと再認識する。

『俺は嬉しいですよ。さくらさんのおかげで俺は存在して…アイシ

アと出会えたんですか?』

『あへへ「…え?」

瞳を潤ませた表情を俺に向ける

『あれ?…』『悪い』としたんです。アイシアは俺と一緒にこのんだつて』

頭を伏せて思つてを馳せるように話す

『あへへ「義へへ?…」

『…でも、それでも俺は消えるといつたんだつたんです。だから俺は桜内義之である前にアイシアとして生きていくつもりです』

『あへへ「義へへ?…」

そへへひそめ涙を拭いながらへへかホッとしたような表情になる

『でも、実際のところなつてるんですか?俺は消える前、ほとんどの人に忘れられていたんですけど』

『あへへ「確証はないけど、今までの義へくんの存在はなかったものとして、そのままアイシアに置き換えられてると思つ…』

『それつて…』

『あへへ「うそ、小恋ちゃんも義へくんじゃなくてアイシアを幼馴染みだと思つてんだつて、他のみんなもアイシアがクラスメイトだと認識してると思つ』

俺は無言でさくらさんの説明を聞く。

じゃあ……義之としての認識があるのはさくらさんだけ……

さくら「でもね、例外もあるの。まだ確認してないから自信ないけど、ボクみたいな魔法使いや……特別な能力をもつた人なら……説明すれば……」

それって……

さくらさんが俺の表情を見て思ったことを察したのか真剣な表情をしゅりくつ告げる。

さくら「うん。音姫ちゃんと由夢ちゃん。2人なら義之くんの存在を忘れてないと思つ」

続く

第3話【遭遇と疑惑】（前書き）

朝倉姉妹初登場。

第3話【遭遇と疑惑】

『え？ 音姉はわかるとして、なんで由夢が？』

俺は顔を傾げる。音姉は魔法使いだからわかるけど、由夢は違うはず…

わくら「たしかに由夢ちゃんは魔法使いとしての力はないけど、特別な能力を持つてるよ。…そういうればお兄ちゃんもあつたつけ…」

わくらさんが感慨深げな目をして中空を見つめる。

くわいさんガ”お兄ちゃん”と呼称するのは音姉達の祖父である、純一さんだ。

そう言えば俺が使えるただ一つの魔法も純一さんから教わったんだつけ。

俺は何気なく小さな白い手の平を眺める。軽く握って、和菓子をイメージする。

それから開くがそこには和菓子どころか何もなかった。

わくら「義之くん。出せなくて当たり前だよ。今の義之くんはアイシアなんだか？」

『やつぱりダメかあ。あ、でも玩具なら出せるよじや？』

わくら「たしかにアイシアなら出せるけど、和菓子と同じ魔法の構

造が違つから今は出来ないと黙つよ

『アリなんですか?』

アリ「うそ。一口に物を出す魔法と言つても術式が違つからね」
アリ「アイシアの知識と経験が定着するまでは無理しないほうが多いよ。あの娘もボクと同じくらいの力のある魔法使いなんだから。」

たしかにな……じゃないと俺の意識を自分の身体に移すなんて真似で
あつにな。

アリ「あとは……義之くんを気に付ければそのまま問題なく学園
に通えるよ」

『あ、でも制服とかは』

アリ「それも大丈夫。世界の認識と改変が出来てるから、アイシ
アとしての義之くんは風見学園附属の三年生だよ」

何だか便利なんだかそういうのないんだか……

俺が苦笑いしてくる

?「弟くんー朝だよー」

?「兄さんー起きしますか?ー」

音姉と由夢が芳乃家にやつて来て居間に向かつていく

ちなみに俺としゃべりやんがいるのはやべりやんの寝室だ。後から聞いた話だと、いくらアイシアの小柄な身体だつと回じ背丈のやべりさんでは一階に運ぶのが大変だつたからだ。

音姫「弟くんはまだ寝てるのかな？ 部屋にこってましゃつ、由夢ちゃん！」

由夢「う、うん」

由夢の声がどもつてこる。音姉の剣幕にひいてるのかな？

それからドタドタと音姉達が一階に上がつてこぐ。

とつあえずどう現状を説明するか悩んでいると

音姫「な、なにこれ！ 弟くんの部屋が……！」

由夢「兄さんの部屋が女の子みたいな部屋に……」

「何ですか？」

やべりさん「それも世界の改変だつたね」

やべりさんがクスクス忍び笑いしていた

音姫「ま、まさか…他の女の子と同棲なつ」とせ……」

音姉飛躍しそぎ。といつかじまで声が届くなんてどんだけ大きく喋つてゐんだよ

由夢「そん…にいた…わけは…」

先程は聞こえたが、その後の由夢の言葉は途切れ途切れしか聞こえなかつた。

まあ、普通は距離があるから聞こえなくて当然。つまりはそれだけ音姉が興奮してるということだ

音姉「やくらわんー弟くん知りませ…んか…」

いつの間に一階から降りてきたのか、唐突にやくらさんの寝室を開けて固まる音姉。

やくら「はい。部屋に入るときはノックしなきや」

一人冷静なやくらさんが注意する。

音姫「すみません…あの、この人は…？」

あ、そういうえば音姉はアイシアと面識なかつたつ。

やくら「…義之くんだよ。今は姿が変わつてるけどね

やくらさんはいきなり暴露した

続く

第4話【認識と無意識】（前書き）

現状説明の回。

第4話【認識と無意識】

やくひり「IJの子は義之くんだよ。今は姿が変わってるし、詳しい説明は順を追つて話すから、2人は居間で待つてくれるかな？」

音姫「え…あ、はい」

矢継ぎ早に話したやくひりさんに完全に驚くタイミングをなくしてしまった音姫は、半ば睡然としながら頷き口ロロロロと出でてこく。

やくひり「由夢ちゃんも、だよ」

由夢「…あ、はい」

音姫の後ろで田を見開いていた由夢が小さく頷いてから出でてこく。

由夢はほんの僅かだがアイシアと面識がある（と言つても姿を見ただけだが）

あの時の少女になつてこる俺に驚いているのだらう。

やくひり「義之くん、もう動けそう？」

やくひりさんが俺の顔を覗き込みながら尋ねる。

『…なんとか、大丈夫です』

俺はゆっくり立ち上がる。やはり目線がかなり低くて違和感がある。アイシアは俺と比べて30cm近く低いから当然かもしれないが…

『あ、服…』

ルーベリ「アイシアが着てた服は酷く汚れてたから、代わりにボクの服を着せてあげたの」

勝手にしてドリーミンねと苦笑するルーベリさん。

『こえ…まだアイシアの身体に慣れてませんから、有りがたいです』

今はアイシアの裸なんて直視出来ないだろ？…まあ、一生アイシアの身体なのだからいはずれは慣れないといけないが

ルーベリ「ルーベリ、じゃあ行こうか？」

俺はルーベリさんと連れだって歩き出した

ルーベリ「…とこいつわけでね、今は義姫さんを認識出来るのはボクと姫君だけなんだよ。」

姫君「…そんな高度な魔法を使いきるなんて、流石ルーベリ君のこ 知り合いですね」

居間に着いてからひととおり説明を終えると姫君が心底感心したよ
うに感づく。

由夢「あの、つまり…他のみんなの記憶や思ってませアイシアをどこ
置き換えられてしまうことがありますか？」

ルーベリ「由夢ちゃん名前…だからね、他のみんなには最初から義

之くんは存在してなくて、アイシアとして知られている。もちろん不都合のないようにな」

セイヘイさんがおじけつつもどこか寂しそうな表情で説明する

音姫「そんな…弟くんが最初からいなかつたなんて…」

音姉が顔面蒼白な状態になつて俯く

セイヘイ「でもね音姫ちゃん。たとえ他の人が覚えてなくとも、ボクたちが義之くんを覚えてたらいいんじゃないかな?」

俯く音姉にセイヘイさんは優しく語りかける

セイヘイ「義之くんが完全にいなくなるよりはましだと思わない?」

セイヘイさんが穏やかに微笑む。

音姫「それは…そうですけど…」

セイヘイ「それには2人とも。呼び方には気を付けなきやいけないよ?今はじいけど、他の人の前で”弟くん”だとか”兄さん”って呼んだら大変だからね」

音姫「う…ううですよね…」

由夢「わ、わかってますよ」

音姉は落ち込み、由夢はどこか照れたように視線を逸らした。

『普通に”弟くん”から”妹ちゃん”に、”兄さん”から”姉さん”に変えればいいんじゃないかな?』

「「やうこりう問題じゃないのよ(ですよ)」」2人がハモつていう

『な、なんで?』

2人の剣幕に見上げながらたじろぐ。

「「気持ちの問題です!...」」

今度は一語一句違わずにハモる

さくら「まあまあ。いきなりは無理だろうし、家でもえろとは言わないからさ。つまりはここにいない他の人や、学園内で呼び方を変えればいいだけだよ」

さくらさんが音姉達をたしなめる。

それからさくらさんの説明は小一時間ほど続いた。

要約するといつだ。

まずは世界が”義之”としての俺を認識しておらず、”アイシア”として認識していること。

つまり、さくら・音姉・由夢を除く義之としての友人・知り合いが”アイシア”としての友人・知り合いだと認識していること。

もう一つは世界の改变。例えば俺の”義之”としての部屋ではなく、

”アイシア”としての部屋になつてゐること。

つまり性別的な不都合は全て置き換わつてゐることだ
何はともあれ、前途多難であるが…アイシアがくれた命だ。大事に
大切に過ごしていくつもりだ

俺は今後起きてゐるであろう様々な出来事に思いを馳せていた

続く

第4話【認識と無意識】（後書き）

次話は雪月花が登場予定。

変更があるかもですが

第5話【邂逅と新生活】（前書き）

現状整理の回。

更新が大変遅れて申し訳ありません

第5話【邂逅と新生活】

「あー、あの話は終わりー。みんな揃つてるし、朝食にしようか
」

「あらんがパンツーと手を叩いて話を終わらせて食事にしようか
促す

「じゃあ簡単なのを「待つて弟くん」音姉?」

俺がトーストにでもしようかなと考えながら立ち上がりすると、
音姉の制止が掛かった

音姉「弟くんは休んで……とにかくまだ制服を着替えてないじゃな
い」

「うう……」

音姉の言葉にあまり思って出したくないことを思って話題に替
る。……着なきやいけないんだよね……

音姉「当たり前でしょ? 制服着ないと学園に行けないじゃない

音姉が腰に手を当つて立しながら怪訝そうな表情で言つ。

「でも女子の制服なんて持つてない

俺は焦つて言つて訳をする。そこで今まで黙つていた由夢が口を開
いた。

由夢「制服ないう兄さんの部屋にありましたよ。」「寧にこつも掛け
てある場所に」

なんだと?

やくひ「やつを言わなかつたつけ?世界は義之くんを”アイシア”
とつて認識してゐから、制服も男子子じやなくて女子なんだよ?」

「やつこえばやうだつた…」

やくひの言葉に頃垂れる。やじでやくひをせ由夢に向き直り
ながらとこどもないうとを言つ出した。

やくひ「由夢ちゃん、義之君の着替えを手伝つてあげて。ほひ、
義之くん”は女子の制服は初めてなんだし”

由夢「はあ。かつたるこですけど”姉さん”的めですかうね”

とこつか姉さんはやめる。

音姫「いいな~…私もおと…”妹ちやん”の着替え手伝いたいな~」

音姫が不満そつた表情をする

わざわざここ直さとでも…

由夢「じゃあ行きますよ、”姉さん”」

「姉さんさやめてくれ…」

先に行く由夢を半ば早足で追いかけながら反論した

由夢「まあ、見た目からだと私が年上に見えますけどね」
ほつとけ。

クスクス笑いながら由夢は俺の部屋のドアを開く。

「うわ…」

アイシアの趣味が反映されてるのか、俺の部屋はえらくファンシーな内装に変わっていた。細かい箇所に”義之”だった頃の名残があるが、部屋自体はほぼ完全に年頃の女の子の部屋となっていた。ちなみに何故か壁にはギターが立て掛けである。

これも”義之”の頃の名残だ

由夢「私も初めて見たときは驚きましたよ。兄さんの部屋が全く別の部屋にかわってるんですから」

俺のほうがビックリだ

由夢「や、話はいいまでにして着替えましょつか」

「やつぱり着るんだな…」

由夢「当たり前ですよ。それに早くしないこと朝早いさんの支度を済ま

せたお姉ちゃんが来ますよ?」

着替えを済む俺に一ヤリと笑いながら脅す由夢。たしかに音姉なら由夢と違つて色々弄りかねない…

「はあ…わかつたよ」

俺はどこかやりきれない気持ちを抱きつつ服を脱ぎ始める。ちなみに着ていたのはさくらさんの昔の服で、上はフリルがたくさん付いたブラウスに黒いミニスカートだ。

アイシアの身体の記憶があるせいか、スカートを履いているのに全く抵抗はなかつた

それから服を脱ぎ去ると下には緑の縞パンと縞ではないが同色のブラ、それを覆う白いキャミソールが露になつた

由夢「…………」

その様子を由夢が無表情でジーッと見ている。

「な、なんだよ?」

由夢「いえ、”兄さん”に女装趣味があるとは思わなかつたので」

俺が照れながら尋ねるとあり得ない返答が返ってきた

「や、これはさくらさんが着せたんだからな、俺が率先して着たわけではないぞ?」

由夢「分かつてますよ、冗談です」

由夢は再びニヤリと笑った

俺はニヤニヤ笑う由夢の様子に軽くため息をつき、風見学園”女子”の制服に袖を通す。

「あれ……？」

なぜか違和感や苦労することなく制服を着ることに成功する。これもアイシアの身体の記憶だろうか？

由夢「…私がいる意味ないじゃないですか」

由夢が一転して不機嫌さを露にする。たしかに由夢はさくらさんに俺の着替えの手伝いをするように命じられた。それなのに全く手伝う」となく俺一人で着たらそりや気分悪いだろう。だから

「えと…『ごめんな、由夢』

由夢「…つー?べ、別にいいですよ…かつたることしなくて済みましたし…それより”兄さん”」

「ん?」

俺が由夢を見上げて申し訳なく謝ると由夢は一瞬顔を赤らめてから視線を逸らしつつ俺に尋ねてきた

由夢「……本当に元には戻れないんですか…？」

真剣な由を真つ直ぐに向けて絞り出すように問いかけてくる。

「…………」じめん

由夢「なんで兄さんが謝るんですか？今の状況は兄さんのせいではないでしょ？」

「でも俺が「兄さん」由夢？」

由夢「そこから先を言つたら怒りますよ？」

「由夢？」

由夢「……ああ！着替えは終わつたんですね、早く行きますよ！」

やや頬を赤らめながら視線を逸らして由夢が出ていく

「あ、ああ」

それに慌ててついてこき、居間に行くと朝なので軽く食べやすい料理が並んでいた。

音姫「さあ召し上がり

満面の笑みで料理を薦める音姫。相変わらず俺の分が多い……だけど。

「音姉、こんなに食べられないよ」

音姫「え？ いつも弟くんと同じ量…あ。」

苦笑いして遠慮する俺に不思議そうな表情をするが、ハツとした表情に変わる。どうやら気付いてくれたらしく

そう、今の俺はアイシアになつてゐる。だから男の頃ならなんら問題ないが、アイシアみたいな小柄少女にはあきらかに過多な量なのだ

音姫「「めんね弟くん」これからは量を気を付けないといけないね」

「「みんな、音姫…」

音姫「「しあうがないよ。今の弟くんは”女の子”なんだから」

申し訳なさげに謝る俺に音姫は女の子を強調して言った

「「めい、それより早く食べないと。みんな遅刻しちゃうよ。」

すぐりやんの言葉に俺達は慌てて食べ始める。やはり身体がアイシニアになつたせいか、あまりたくさん食べられないな…

俺はこれから始まつていぐ日常に不安を募らせながらびびりと咀嚼していた

続く

第5話【邂逅と新生活】（後書き）

次回の更新も遅れるかもしません

第6話【友人と学園】（前書き）

ななかと小恋初登場の回。

今回は短いです

第6話【友人と学園】

俺達はなんとか朝食を済ませ、芳乃家を出た

音姫「どうづく。」

「どうづく？」

音姫「…女の子になつた感想は？」

唐突に音姫が問いかけてきたので顔を傾けると今度は顔を近づけてきて小声で再度尋ねてきた

「どうづくと言われても…あまり違和感ないかな。…」これも魔法のおかげなのかも」

音姫「…………そつか」

由夢「…………」

俺が探るようにして感じた感想を述べると音姫は寂しげな表情をし、由夢は無言で何か言いたげな表情で見据えてきた。

？？「おはよー、アイシア」

そんな気まずい雰囲気を破るよつてにして聞き覚えのある声が響き渡つてきた

音姫「おはよー、小恋ちゃん」

由夢「おはよーひー」やります、小恋先輩」

音姉達とともに振り返ると、義之時代からもはや見慣れた幼馴染み、月島小恋が立っていた。そこに俺が挨拶するより先に音姉が小恋と同じように明るく挨拶し、由夢が礼儀正しくクールに挨拶した

小恋「おはよーひー」やります、音姫先輩、おはよー、由夢ちゃん」

「…………おはよー、小恋」

小恋が音姉と由夢に挨拶した後、俺が緊張しながら挨拶すると不思議そうな表情になつて顔を傾ける。

小恋「アイシアどうしたの? ビー」が具合悪い?」

「だ、大丈夫、平氣」

小恋「そう? ならいいけど……」

心配げな表情で顔を近づけてきた小恋に焦りながら言ひと、まだ心配げな表情のままだがとりあえず納得して離れた。……義之時代にはなかつた態度だな……あつたら困るが。

それからは専ら音姉と小恋が他愛もない世間話を始め、俺と由夢はそれを無言で眺めるといった流れで登校していく。

そしてとある十字路に差し掛かったその時、

「? ? ? 「おはよー アイシア~」

唐突に俺に飛びつく人物がいた

俺の知りつるかぎり、こんなフレンドリーなスキンシップを取る女子生徒は1人しかない。

「…………ななか。苦しいんだけど」

ななか「もー、つれないなあ アイシアは」

俺がため息をつきながら言つと相変わらずの人懐っこい笑みを浮かべながら抱き締めてきた。む、胸が…胸が…！

小恋「おはよーななか …つてアイシアがもがいてるナビ…」

ななか「おはよー小恋 …つて、わあつー？」

俺が窒息寸前になつていると小恋がななかに挨拶してからつっこみできた…死ぬかと思った…

ななか「ごめんね～ アイシアがあまりにも可愛くてつー…」

なんだかななかは相変わらずだなあと苦笑い浮かべる。

小恋「そのへんについては私も同感だけど窒息死とかになつかねないから気をつけてね？」

ななか「はいはーい」

小恋が困り顔で注意するとわかつてているのかいないのか、一瞬一瞬笑顔で返事する。なんか小恋のキャラが変わっているような…

それからはやつぱり小恋の説教が通じていらないななかが俺を後ろから抱きしめながら（非常に歩きづら）歩き、小恋がそれを注意し、

音姉と由夢がひたすら苦笑こすると、この形で学園への道を進んでいた。

続く

第6話【友人と学園】（後書き）

更新スピードがなかなか上がらず、申し訳ありませんm(――)m

第7話【悪友と学園生活】（前書き）

杉並＆板橋初登場。

試験的に1ページ千文字前後にしてみました。読みにくければ以前に戻しますので、ご感想にお願いしますm(_ _)m

第7話【悪友と学園生活】

みづやくななかの抱き付きから解放（流石に見かねた音姫に注意されると名残惜しげにしつつ離してくれた）され、ほどなくして学園が見えてきた。

「？」「おはよう諸君。相変わらず華やかだな」

唐突に後方から偉そうな声が聞こえてきた。まあ、こんな仰々しい話し方をするのは一人しかいないが…

「…おはよう、杉並。お前も相変わらずのようだ」

杉並「フフフ、さう誉めるな」

「誉めてない」

俺が無愛想に言つと不敵な笑みを浮かべる。“義之”時代からの悪友の杉並だ。下の名前は知らん。といつかアイツの下の名前はさくらさんとの見た目と同じくらい風見学園の七不思議的な気がする。

音姫「おはよう、杉並くん。また何か企んでまゆきを困らせたらダメだよ?」

杉並「フフ…なんの?」いや。勝手に高坂まゆきが付きまとつて来るだけだ。俺はまだ何もしていないぞ?」

音姫「”まだ”なんだ…」「

音姉に注意されるも杉並の奴はニヤリと不敵に笑いながらはぐらかす。確かにアイツは普段は対したことはないが、学園祭などの大きなイベントでろくでもないことをやらかすためにまゆき先輩をはじめ、生徒会には要注意人物として挙げられてこる。

杉並「さて、俺はそろそろ行かせてもらおうアーディオス！」

杉並が再び偉そうに挨拶して颯爽と去っていって、そのあと「？？？」までー！ 杉並ーー！」

去つていった杉並を追う人影。言つまでもなくまゆき先輩だ

音姫「おはよ、まゆき！」

まゆき「ああ、おはよつ音姫… って、杉並を引き留めてくれないとダメじゃないつ！」

音姫「えー？ 私なんで怒られるの？」

それは「もつとも。

音姫「杉並くん」やっぱり”何かしでかしたの？」

確定事項か。まあ奴ならやりかねんが

まゆき「あいつ放送室にふしだらな物を放送しようとしたのよ

そう言つてまゆき先輩は没収したR-18指定なブツを音姉に見せる。あ、嫌な予感

音姫「…え、え…」

まゆき「音姫？」

「音姉？」

フルフルと震える音姫。

音姫「えつちなのはいけませーーん…！」

まゆき「うわっ！？」

「ひう…」

突然音姫が激昂し俺とまゆき先輩を放置していくものの三倍（俺的主観）で杉並が去った方向へ猛ダッシュしていった。ちなみに由夢は「やつぱり…」と言わんばかりの呆れ顔、ななかと小恋はポカーンと目を丸くしている。俺は思わずアイシアの幼い声で悲鳴を上げてしまった…

まゆき「ちよ、音姫！待つてっ！」

いち早く再起動したまゆき先輩が走り出しが、すぐにこちらを振り返ると苦笑いし

まゆき「じゃあ妹ちゃんに妹くん、またねっ！」

と言つて音姫（暴走↙e↙）を追いかけていった。

そうか…”義之”時代は『弟くん』だったが今はアイシアになつて
るし、『妹くん』だと由夢と被るから『妹ちゃん』なのか…

深くため息をつく俺を見て笑いを堪える由夢。にやう。覚えてろ
よ…

閑話休題

俺は下駄箱で由夢と別れ、ななかと小恋とともに自分の上履きの元へ向かう。

小恋「アイシア?」つちだよ?」

「あ、そつか

ななか「も～アイシアはドジつ娘だな～。そこがまたいいんだけど

「

俺が思わず男子生徒側の下駄箱に向かおうとして小恋に不思議そうな顔をしながら止められる。苦笑しながら小恋達の元へ向かうとななかが二へラ～つと綺まりのない笑顔（口が猫みたいな感じ）を向けながら抱き付いてくる。

その態度に苦笑いしつつ【アイシア】とプレートが貼られた下駄箱を開ける。やはりというかなんというか…俺の上履きは女子の『デザイン』に小柄なアイシアのサイズに合わせた物に変わっていた。

…もう慣れただけどね…はあ…

? 「おお～っす！ 3人供」

そんなおり、俺達に声を掛けてくるビートが軽薄そうな口調の人物。

小恋「おはよ～、涉君」

ななか「おはよ～、板橋くん」

「…おはよ～、涉」

俺の”義之”時代からの悪友その2、板橋涉だ。

涉「うん、やっぱ涉華やかだね～。誰か俺と付き合わない？」

小恋「ごめんね涉くん」

ななか「私はちよつとね～」

「…キモッ」

涉「ガ～ン～…といつかアイシアひど～！」

三者三様な答えた専門用語。外見がアイシアでも中身が義之なんだよ。誰が好き好んで涉と付き合つての

ななか「でもそれがアイシアの萌えポイントなんだよ～。ビートがムスッとしていて無愛想なんだけど、それがいいつていうか～」

といいながら再び抱き付くななが。すっかり抱き付きキャラになつ

ちまつたな…

由夢「先輩方。 そろそろ教室に向かわないと遅刻しますよ?」

超猫がぶり状態の由夢がかなり冷めた目で見てから自分の教室に向かつた。 それに合わせてそそくさと教室に急ぐ俺達。

なんだか女になつてからこんなんばかりだなとふと思つてしまつアイシアとしての学園生活初日がスタートするのだつた…

続く

相変わらずの更新スピード激遅…謝つてばかりですが本当に申し訳ないです

言い訳をしますと、文章研究の為に他の作者様の作品にハマつて読んでしまったり、リアルに仕事が忙しくなつたりと書くモチベーションを上げれませんでした

といつあえず仕事も安定してきたのでなるべく早く更新していきたいと頑張りますので作品についてのご感想、これはいつしたらいいのでは?という意見があれば是非書いて下さいませ。

厚かましいお願ひではありますが、それがモチベーション上昇につながり、更新スピードが上がるきっかけにもなりますのでどうかよろしくお願ひ致します m(—)m

第8話【羞恥と混乱】（前編）（前書き）

雪月花勢揃い。

1ページに千文字近くだといつぱりいつぱりして見づらいやみたいのです
で、戻しました

第8話【羞恥と混乱】（前編）

教室にたどり着いた俺と小恋（ななかは別のクラスなので泣く泣く自分の教室に向かった…数分間くらい抱きしめられたが）はドアを開ける。やはりというかなんといつか…特に注目されなかつた。世界がアイシアを普通の女生徒と認識してゐる証拠らしい。

尤も、アイシアの容姿は普通の女生徒とは言いがたいが。

そんなビリでもいいことを考へてゐると、アイシア容姿の俺と同じくらい普通じやない女生徒”2人”が近寄つてきた

? 「…おはよ」

? 「おはよ～」

小恋「おはよ～、杏、茜」

「…おはよ～、杏に茜」

”義之”時代からの女友達、雪村杏と花咲茜だ

ちなみに隣にいる小恋と3人合わせて【雪月花】なんて呼ばれてたりする（雪村に月島に花咲だからだ）。

…せういえば、アイシアの容姿になつてから杏との田線の高さがほとんど同じな気がする。それだけ杏も小柄だったというわけか

杏「…何、アイシア」

「別に」

杏「…そつ」

杏は俺が見てることに気付く無表情の視線を向ける。俺が素っ気なく返すとをして興味ないのか小恋達に視線を移した

茜「なんかさー、杏ひやんにアイシアちゃんが並ぶとほんとんど姉妹みたいだよね」

小恋「うん、私もそいつ」

杏「…じやあわたしが姉で」

茜と小恋が好き勝手に言ひ出す。

なんで杏が姉だよ…年齢的にはアイシア（元の持ち主）のほうが遙かに年上なのに。

とは言ひ出せず無愛想に見てると茜が「ホントそつくつー」と言ひながら杏もひとも俺を抱きしめる。

今日はこんななんばつかだ…

…それと、アイシアの身体の条件反射か知らないが茜の”普通じやない”部分を見ると気が重くなる。

なんだか憎らしい

それから満つなく一日が過ぎる……とおもこねや

小恋「アイシア？次の授業は体育だから更衣室にいって。」

……なんだと？

続く

第8話【羞恥と混乱】（前編）（後書き）

今回サブタイが前後編です

理由はサブタイのネタが切れたので（――・）

第9話【羞恥と混乱】（後編）（前書き）

魅惑の着替えシーン？

過度の期待は禁物です（笑）

第9話【羞恥と混乱】（後編）

女子更衣室。

そう、女子更衣室である。今の俺はアイシアなんだから体操服に着替えるのに利用するのは当然であつて…

小恋「アイシア…どうしたの？」

「え？ ああ、うん、何でもない何でもない」

小恋「そう？」

ただいま絶贊混乱中。いくらアイシアの身体で女性のハダカに馴れたとはいえやはり精神は”義之”なわけで。

つまりなにが言いたいかと言つと…

男にとつては夢のパラダイスが広がつていた

涉なら鼻血を出して喜ぶところだらう…確實に

茜「ア・イ・シ・ア・ちゃ～ん」

「 はうわー？」

唐突に後頭部に二つのバレーボール もとい、茜の”普通じゃない”部分が押し付けられる

はつ！？一瞬意識が飛んでいたようだ

茜「どうしたの～？着替えないの… はつ！？もしかしてアノ日なの？！」

「いやいや、違うから」

妙な勘違いをする茜に苦笑いを浮かべる。…アノ日ね…。女の子でいる以上はいつかは避けて通れない道だ。せめてなつたときに慌てないように知識とか必要な物を用意しといたほうがいいかもな…

杏「…どうせ劣等感を感じてるんでしょう？茜がそんなもの押し付けるから」

と、ニヤリと不敵な笑いを浮かべたあと再び自分の着替えに戻つた

杏を見ると何故か気が軽くなる…似たような体型のせいだな、うん。

杏「…………今失礼な」と考へなかつた？

「いや、なにも」

急に杏が疑いの眼差しを向けてくる。俺は視線を反らすと杏はゞいが眠そうな目を細めてジットと見てくる

怖いって…

それから俺はこれ以上泣つているとあらぬ疑いをかけられそう（レズだとか…）というか精神は男なので中身は正常だが（）なのでなるべく周りを見ないようにして手早く着替えた。

その際に、小恋が隣で着替えるものだから小恋の”アンデスマロン”が視界の端に入つて必死に記憶のデリートしたり（具体的には自分のを見て上書き）、茜が真っ正面から”柔らかいバレーボール”を見せつけたり（そのときは自殺しそうなくらい気が重くなつた…アイシアの身体の条件反射？）して慌ただしい着替えが終了した。

また制服に着替えるときにひと悶着あるんだろうか…ああ、気が重い…

続く

第9話【羞恥と混乱】（後編）（後書き）

お毎に続いての1-1話更新。

再びスランプ気味なので言い回しが可笑しいかもしないです（

—）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4875m/>

D.C.?E.F.～ダ・カーポ?エターナル・フォーエバー

2011年10月7日11時02分発行